

## 長崎くんち・今年のみどころ（一九編）

越中 哲也

一はじめに

長崎くんち由来については、前号までに種々と記してきたので、今回は各踊町の簡畧な歴史を加えながら、其の町自慢の傘鉾・奉納踊の事を記すことにした。

一五七一年、長崎の町が開港されて以来、町には先ず内町ができ、次いで外町へと発展していった。内町には主として役柄の人が多く住み、外町には職人関係の人が多く住んでいた。町名をみて内町と外町の違いはわかる。然し、一七〇〇年（元禄時代）になると内町・外町との区別はなくなり、賑かな通りが外町方面に移ってきて、内町の人達も次第に外町に移ってきたので、内町外町の区別は次第になくなってきた。

時代と共に長崎くんちは、次第に盛り上がり、今まで諏訪・住吉の二神のみの御輿を中心に行ってきた「長崎くんち」も、「長崎集」によると「宝永二年ヨリ諏訪社神輿三ツト成ル」とあり、この年（一七〇五年）より長崎くんちの行列も現在のよう



文政年間丸山傘鉾図（長崎名勝図絵）

に森崎社の神輿も加えた三体神輿の行列となり、長崎くんち奉納踊は益々にぎやかになってきた。以後、傘鉾の飾物にも各町自慢の趣向が加えられ、型も大きくなり、傘鉾の幕も豪華になってきている。

桶屋町。この町は町名の示すように初期の頃は生活の必需品であった桶類を造る人達の組合から発達した町であった。其の桶とは風呂桶、洗面桶、洗濯たらい、台所のたらい等々であったと言つ。然し、寛政年

は目出度く王女の一行を船に乗せ、長崎に引きあげてきている。そこにぎやかな模様を石灰町の奉納踊とし、御朱印船には賑かな唐離子のはやし方を勤める町内の子ども連中が乗り込み、船の「上の間」には荒木宗太郎と美しい唐衣装で着かざったアニオさんが乗っている。傘鉾は先年新調したもので祝い物のヒョウタン二個を台上に配し、幕にはアニオさんの行列を美しく描いておられる。

船大工町。昔の此の町は石灰町に続く海岸線にそって開かれた町で、石灰町沖に碇を降した唐船を修理する船大工さん達が多く住みついていた町であったが、寛永一九年（一六四二）この町の上に丸山、寄合町が開かれると船大工町は「山の口」の町として商家がつかめかけ、町中を流れる川には「思い切り橋」見かえり柳が名所として造られ町は大いに繁盛している。傘鉾は町名に因んで「木はだ章」の屋根に棟上げ祝の用具を配し、紅白の布をつけた「趣向よろし」と評判の傘鉾である。奉納踊も町名に因んで町内子ども衆が「先びき」した。離子に乗って長崎刺繍の船頭衣装を身につけた船頭さんを中心に、川船が諏訪の丸馬場に威勢よく乗りこんでくる。万屋町。本来この町は本鍛冶屋町といひ鍛冶職の人が多かったといふ。然し長崎の町が貿易港として繁昌すると共に、中島川の川口が大いに利用され、日用萬物類は此の町を中心に取り引きされるようになったので、町名を延宝六年（一六七八）万屋町と改めている。そして問屋衆が多くこの町に集まってきた。この町の奉納踊は始め角力踊を奉納していたが、その後、この町に滞在していた呼子屋は安永七年（一七七八）奉納踊に「鯨引」を奉納するように勤めている。この奉納踊は大評判となり、以来工夫に工夫が加えられ今日の「鯨引」が完成している。また此の町の傘鉾の幕には町名に因んで魚問屋の萬魚すくしを長崎刺繍であらわし長崎を代表する工芸品の一つとして市文化財に指定されている。

丸山町。この町は寛永一九年（一六四二）に開かれ、長崎くんち奉納踊に寄合町と共に参加した記録が残っている。戦前は必ず奉納踊の先陣は丸山町・寄合丸が一番に勤めねばならぬと奉行所は命じている。今年も使用される此の町の傘鉾は、現在する全町の傘鉾飾りの中では最古の型によつたものとされている。奉納踊は江戸時代には「小舞」という古風なものであったと言つが今は伝えられていないが、今尚この町には「長崎検番」の花柳流の舞踊が伝えられており今年奉納踊には四十二年ぶりに丸山花街伝統のくんちの奉納踊を拝見できることが楽しみである。

間（一七九〇）の同町の住人表を見てみると、オランダ大通詞名村多吉郎、漢詩文学者打橋竹雲父子、奉行所役人兼之名藤家など有名人が多く住んでいる。其の故に他町の人が真似のできない当時としては珍らしい「オランダからくり象時計」を傘鉾飾りに、また其の下の幕には長崎刺繍十二支図（共に市文化財指定）を作りあげている。今年も其の名物の傘鉾を先頭に押し立て、続いて町内子ども連中も加わって賑かに「本踊」が奉納される。

榮町。この町は戦後、旧袋町と旧酒屋町が合併し新しく発展した町である。そこで、今回使用される傘鉾は、酒屋町の旧家松田家の一手持で奉納されていた傘鉾で「秋の紅葉の大樹の下に、源氏物語を優雅に描いた貝合せの貝四枚を配した。」ゆかしい感じがするダン飾りの傘鉾である。奉納踊は長崎花柳流に伝承されてきた「長崎オランダ万才」である。この踊は、長崎秋の大祭「長崎くんち」に、遠い異国の人達・ポルトガル・オランダ・中国の人々が馳せ参じ大いに長崎の街に集い、今後とも、此の街が大いに、賑かに、栄えゆくようにと踊り納めるといふ、町名にびつたりの奉納踊である。

本石灰町。昔、この町のあたりを浜崎といひ、横の玉帯川の川口は唐船の荷揚げ場として大いに活用されていた。一七世紀初頭、唐船は天川より船のバラストとして積み渡ってきた石灰が全国に大いに売れていた。それで此の浜崎の地を長崎の人達は石灰町とよび石灰の事を長崎では別名「アマカワ」とも言っていた。そして、其の天川方面の地に長崎の貿易商は次ぎ次ぎと貿易船を出している。そして、その船を御朱印船といつた。この町の奉納踊は其の御朱印船を奉納している。その御朱印船の代表者といえは長崎の人達は必ず荒木宗太郎という。それは宗太郎が数回交易する中で元和八年（一六二二）安南国（現在のベトナム）の国王玩氏に大いに信頼をうけ王女アニオさんを嫁におくられたので、宗太郎

### 風信

この「ながさきの空・第二九〇号」が発行される頃は、我が歴史文化協会は大きいそがしである。それと言つのは、協会事務所のある桶屋町が七年ぶりの踊町に当り、本会よりは前回も加勢に与つた蒲池、川崎、田村、陸門、各氏の他、今回は新しく松澤、眞野、荒濱の各氏をはじめ、女性軍も裏方として十数名お加勢下さる事になったからである。そして其の御婦人方の中には遠く京都よりワザワザお出かけ下さる方もおられるとお聞きした。「郷土の祭り」への参加は何んとも言えぬ楽しさがありますからねと言われる。

然し、其の加勢人の衣裳の準備が大変なのだそつです。山高帽に紋付袴、御婦人方は袴の晴れ着。それに七日の朝の集合は午前五時半。「御婦人の着付は四時からですよ」と事務局担当の上田女史、そして「長崎くんちつて、まあ大変な事なですね」と私の周囲の人達は呆れていた。「今年もお世話になります」と、名古屋の榎山学園の井上友幸先生他三名の先生方が先月私の処にお見えになった。「今年で先生の処に参りますのは二十八年目ですよ」と言われる。昭和六十二年、当時私は市立博物館に在職していた。榎山学園の教頭先生がお見えになって、今年の秋より私達学園の修学旅行を、ただ自由に学生を長崎に行かせるだけでなく、一定の方向を決めて学生達に勉強させたいので其のコースを考えて下さいと言われる。「早速、私は当時、市博物館の原田博二学芸員と相談してセツの専門コースを決めている。これが現在の「さるく博」の原型だったかもしれない。今年十一月十五・十六日より二回にわけて四百人の生徒さんが来られると言つ。コースは、一、長崎キリシタン研究会の各委員を其の学習指導者をお願いした。よい成果があげられますように。

宮川雅一氏より自著の「長崎散策第三・向井去来の句碑を訪ねて」を、シーボルト記念館より「鳴滝紀要16」を寄贈いただいた。両書共地方史を研究する上には是非参考資料として座右におかれる事をお勧めできる書物であった。

長崎歴史文化協会研究室  
TEL 八二二一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

